

福岡市都市景観賞審査員の紹介



永崎 明子

(九州造形短期大学教授：ビジュアルデザイン)

今回の応募物件では、建物・緑などの要素に加え、情報・交通など対象分野の拡張が感じられた。景観の維持・形成のしくみを対象にする方向性を示唆していると思う。また市民の地味な地域活動も賞賛したい。



岡本 均

(西日本短期大学教授：造園設計)

健全な精神は、健康な身体に宿る、という言葉があるが、さしずめ健全な市民は健康な都市に宿るであろうか。健康とは生命体として周辺環境との程よいバランスがとれている状態を指すわけであり、都市が健康であるためには、緑とのかかわりが不可欠であろう。



今村 洋子

(九州朝日放送テレビ営業課副部長代理)

変わりゆく新しい景観からも、大切に守り続けた景観からも福岡の呼吸を添み取りたいと思う。日本中が同じ顔を持つまちにならないためにも福岡らしさをもっと考えていきたい。



仲間 浩一

(九州工業大学助教授：景観工学)

ふだんほとんど福岡、博多のまちを歩かない身でありながら、困難な役目を引き受けることにした。景観という幅広い領域のなかで、体験する人々の立場に身を置き議論をしたい。福岡の風景に自分を育ててもらったつもりで臨むつもりである。



委員長 佐藤 優

(九州芸術工科大学教授：ビジュアルデザイン)

福岡は誰もが認める元気なまちだが、新しもの好きの反面で本物志向も強い。厳しい社会状況を踏まえて熟慮されたものが残る時代は、あるいは歓迎すべき時代なのかもしれない。長い時間をかけて醸成されていく都市景観のために、価値のある行為や言葉をしっかりと見つめていきたい。



西山 徳明

(九州芸術工科大学助教授：都市計画)

景観賞の過去の受賞リストを見れば、その都市のまちづくりの姿勢が一目で分かる。景観賞の選考とは、今の人が目新しく楽しむ景観だけでなく、過去から人々が大切に継承してきた景観の意味を見つめ直す機会でもある。



竹下 輝和

(九州大学大学院教授：建築・地域計画)

私は、人間と環境の関係論において、やや人間に主体をおいた「景観の認識」より「認識の景観」を基本に、都市景観を考えたいと思っている。場所の、場所からの、そして、場所への思いを感じさせる都市景観づくり、をモットーとしている。



馬場 周一郎

(株式会社西日本新聞社文化部長)

一人で生きていたとき、都会のイルミネーションは冷たい光でしかなかった。一緒に生きる人と出会ったとき、それは明日への灯火となる。美しい景観とは、それは生きているという手ごたえの中で広がっていく自分だけの小宇宙なのかもしれない。



高 泰久 (福岡市都市整備局長)

都市景観とは非常に幅広い概念であるが、本来は一つの建物、一人の人間だけで形成しうるものではないと思う。社会的活動としての都市景観の形成という観点から、これからも都市景観、都市景観賞を考えていきたい。